



2004年3月31日

日本応用心理学会ニュースレター

——コミュニケーションの広場——

No. 10

9月4日・5日、日大商学部でお会いしましょう！

第71回大会準備委員長 嘉部 和夫

第1号通信でお知らせしましたとおり、第71回大会は日本大学商学部でお引き受けすることになりました。皆様にはご存じのことと思いますが、本学会の創始者のお一人、渡辺徹先生が第1回大会を開催され、その後第18回大会以来、丁度50年間、日本大学では開催されておられませんでした。これを機に今までのご無沙汰を深謝すると共に、大会をお引き受けすることに決断致しました。とは言いましても、日本大学商学部は心理学研究室があるわけではなく、経営学科に外島裕先生、総合教育に時田学先生と私の、計3名の心理学担当者がいるのみです。したがって、それほど立派な大会はできないと考えておりますが、日本大学各学部の心理学担当者と連絡を取り、準備委員会を組織致しました。そして顧問として経済学部の馬場昌雄教授にご就任頂きました。

今大会は3つの視点から構成致しました。一つはテーマ、もう一つは発表形式、もう一つは大学院生の扱いがその視点です。

テーマについては「現実生活と心理学」とし、社会の現状に応えようと考えました。現実の生活では様々なニュースが毎日流れ、その中のいくつかは『それは心理学の問題だ』と言われながら、これに応えようとする学会は少なく、これでは社会から隔離された象牙の塔になってしまうような気がしてなりません。そんなことから、現実生活に密着したテーマを実際に心理学を活かして実践されている方々に

ご講演をして頂くこととして、しかも学生にも聴いてもらえるように、公開とするよう取り計らいました。大会記念公開講演は、教育に関し一石を投じておられる“賢治の学校”を主宰しておられる鳥山敏子先生に「人間の育ちなおし」についてお話を考えております。その他に、「交通と心理」「マーケティングの実際」「痴呆性高齢者の介護」「CFから見た消費者心理」等の公開講演を企画しております。



発表については、パネル発表を個人発表のメインに据え、個人発表でじっくり討論をしたいとの希望を持つ方のトークイン（30分の発表）、連続発表をまとめて発表するラウンドテーブル（60分または90分）、そして自主シンポジウム（企画者が正会員であればシンポジストは非会員でもよい）を加え実施したいと考えております。

また、最後になりますが、若手研究者の育成と学会への入会を配慮して、大学院生の諸経費をできる限り安くすることを考えております。是非この機会に大学院生の勧誘をよろしくお願い致します。

予定通りに進みますかどうかわかりませんが、準備委員一同頑張りますのでよろしくお願い致します。詳しくは第2号通信をご覧ください。

(副理事長、日本大学商学部教授)

目次

9月4日・5日、日大商学部でお会いしましょう！	認定「応用心理士」認定審査委員会からのお知らせ
.....嘉部 和夫 1馬場 房子 4
日本応用心理学会と私	学会賞・奨励賞選考委員会から
.....稲毛 教子 2垣本由紀子 5
応用心理学と私	シンポジウム委員会報告
.....秋山 俊夫 3松浦 常夫 5
日本応用心理学会への期待	2004年度日本応用心理学会研修会について
.....坂野 登 4林 潔 5

名誉会員からのメッセージ

2003 年 9 月に流通科学大学で行われた日本応用心理学会第 70 回大会総会(森下高治委員長)において、稲毛教子氏、秋山俊夫氏、坂野登氏の 3 名の先生が名誉会員に推選されました。今回、3 名の先生から本学会とのご関係についてご寄稿いただきました。

日本応用心理学会と私 名誉会員 稲毛 教子

表題のごとく、いたって個人的なことを書かせていただきます。

心理学に賭して職業生活を送る人たちは、いくつかの心理学会に所属するようですが、私も 1956 年来、日本心理学会、日本教育心理学会、日本応用心理学会と次々に入会し、その後、日本児童精神医学会、日本保育学会に、さらに、産業・組織心理学会等いくつかの学会に所属し、10~16 年で退会したり、あるいは 70 歳定年退職を機に退会したところもありましたが、現在もなお所属させていただいているのが日本応用心理学会です。このように最後まで所属ということになったのは私の研究テーマと無縁ではないのです。

1958 年日本応用心理学会第 25 回大会で「質問紙法による乳幼児の精神発達検査・第一報告」を発表以来、1989 年第 56 回大会で「乳幼児精神発達診断法作成後 28 年の発達の变化」、1997 年第 64 回大会で「育児困難を抱える母親の分析」と子ども一母親を対象に研究を進めてきましたので、これらの発表テーマをみる限り応用心理学会でなければならぬという必然的理由はなかったのですが、この間に私の研究対象・テーマは大きく変化しています。

最初に勤めた愛育研究所では、部長の牛島義友先生のプラグマティズムの行動の影響を受け、次の南博先生が研究部長の日本リサーチセンターでは、子ども産業化のマイナス面への未然対策を願って移ったのですが、一業種一企業ということで構成された機関という制約もあって、スープ・つゆの素、オペ



ロン・テトロン等の商品開発に関するものが多く、その上、企業秘密遵守から学会発表ままたならないという 3 年間でした。

そのころ恩師白井常先生から「なぜ子どもの研究を続けなかったの? おいしいことをしましたね」とある学会大会場でいわれたのですが、深く一分野を専攻する道もあるが、異なる専門分野からの刺激をもらって、より現実的問題に対応することの面白さに魅せられていましたので、次なるテーマを発展すべく早稲田大学生産研究所に移ったのです。そこでの 22 年間は兼子宙先生らの指導のもと、働く女性問題、職場での男女平等をかちとるための前提条件となる能力開発、具体的には、女性のリーダーシップの育成であり、キャリア形成だったのです。そんなわけで 1981 年第 48 回大会で「公正理論と女子従業員のキャリア・パス形成」を発表しました。

このように、私の研究対象・テーマの変化にもかかわらず学会も変えることなく一貫して発表できたのは日本応用心理学会だから可能だったと思っています。

東京国際大学には豊原恒男先生構想による新学部で早大から移り、26 年間に 2 回日本応用心理学会の大会開催校になるという機会があって、そうしたときなどに感じたことは、諸先輩の先生方が営々として築きあげてこられた「柔軟、かつ、なごやかさに満ちた学会、時代の変化をうまく吸収し対応できる学会」ということでした。その反面、なんでも的な印象をもたれかねないことを危惧し、「応用心理学とは?」と原点をただず議論も展開されていますが、それを真摯に問い続ける姿勢を忘れないで、今後とも柔軟かつなごやかさのある学会であり続けることを切に祈念しております。

(常任理事、東京国際大学名誉教授)

応用心理学会と私

名誉会員 秋山 俊夫

筆者は昭和25年4月に広
大心理学科に入学した。恩師
の古賀行義教授は応用心理学
の発展に熱心だったと聞いて
いる。昭和30年に第20回大
会が広島で開催されたのを機
に入会したと記憶している。



当時、全国規模の心理学会は日本心理学会、応用
心理学会ではなかっただろうか。心理学研究の
進展もあり、その後急速に学会が急増していった。
例えば日本心理学会においては知覚研究の発表が中
心であり、片寄っている。教育の領域にも心理学的
なメスを入れたいといけないうような理由で
教育心理学会が誕生した。以後様々な名前の心理学
会の設立が後を断たず、勧誘されて入会するうちに
気が付いてみたら筆者もかなりの数の学会に加入し
ていた。

応用心理学会は他の心理系の学会に比べ、アット
ホームな雰囲気をもっているようであった。教え子
を学会という雰囲気に慣れさせるためには応用心理
学会の雰囲気が最高のように思われた。さらに学会
場では旧知に出会い、一献傾けるのも楽しみの一つ
であった。加入学会のうちでは出席率が良い方
であった。そのうち学生紛争が次第に拡大・激化する
につれ、学会の雰囲気も暖かさが消えていくように
感じられてならなかった。典型は日本臨床心理学会
であった。日本精神神経学会ほどではなかったもの
の、資格問題を巡って荒れに荒れた。資格は必要と
する者は、新しい学会(心理臨床学会)をつくり、
臨床心理士を資格化しようという動きになった。筆
者も一度はその一翼を担ったことがある。学園も変
わった。学園紛争の火中にいた学生が大学の教員と
なったこと、それに時代の流れも影響し、大学の研
究室の雰囲気は次第に情緒性を失い、人間関係は表
面的な付き合いになっていった。老教授が学会を引
き受けてきても若手から「まず話し合い」という彼
らの集団主義的圧力がかかり、相談なく引き受けて
きた先輩教授を咎めるのが常識ようになっていっ
た。

精神衛生法から、精神障害者の人権を守る新しい

精神保健法が成立した年、都立大学の教授をされて
いた森重敏先生からお手紙をいただいた。「この時
期大変だろうが応用心理学会を引き受けてくれない
か」という内容であった。教室主催ということにな
ればそれ相応の面倒な手続きを踏まないといけな
い。考えただけでも疲れる。「先生だけでされたらど
うですか。私たち手伝いますよ」教室の若手の教官
若干名、卒業生、受講生たちが悩んでいる私にささ
やいた。神の声であった。「教育大学の秋山が引き受
けるという形なら可能です」森先生からその形での
引き受けて O.K. の了承の手紙が届いた。

卒業生、学生はもちろん、同門の精神科医たち、
出版社、産業界、地方自治体からも学会開催の費用
にと過分の援助をいただいた。何はさておき、運営
資金が潤沢でないとできないだろうとの配慮からで
あった。会場は教育大学を主会場、博多、北九州、
太宰府を副会場でシンポジウム、心理臨床研修会な
どが開かれた。本部会場の人の集まりはやや淋し
かったが、他は盛況であった。人の暖かい気持ちか
どんなすばらしい助けになるかを実感した。

それから7年後、教育大学を無事退官、私学教育
に携わるようになった。そこでは、学会に学生を同
伴する必要もなくなった。学会費も馬鹿にならな
かった。送ってくる学会誌で書齋はゴミの山であ
る。今までに得たものを教えるだけの人生だから、
心理学研究と縁を切ろうと考え、学会に次々退会届
けを出していった。「臨床心理士」の認定も筆者の臨
床活動には関係なく、いわゆる金食い虫であり10
年を機に申請をとりやめた。何故か応用心理学会だ
けは退会しないでした。心のどこかに発表したいと
いう教え子のことが頭にあったのであろう。それが
名誉会員に推薦ということになってしまった。この
際ついでに「応用心理士」と思い、申請・認定し
ていただいた。講演・雑原稿の後宣伝のつもりでな
るべく応用心理士の名前をだしている。その時いつ
も考えることだが、現実生活の殆どの領域を扱う応
用心理学の性格から考えて、「応用心理士」だけでは
焦点がボケてしまう。括弧臨床とか括弧交通とい
うとわかりやすいと思う。また実際にそれが各所で認
知されるよう、宣伝、職場の開拓も必要かもしれない。
それとも相変わらずゆったりした自由な学会の
雰囲気を維持し続けますか？

(福岡教育大学名誉教授・心理臨床研究所主宰)

日本応用心理学会への期待

名誉会員 坂野 登

この度は名誉会員に推挙され、会員歴の短い私にとっては身に余る光栄でまことに恐縮の限りです。2000年9月に、日本応用心理学会第67回大会を神戸親和女子大学で開催致したことからいしか学会のお役に立てなかったのではないかと反省致しております。しかしご推挙頂いたからには名誉会員の名に恥じないよう、日本応用心理学会のために今後がんばっていく所存でありますのでどうぞよろしくお願い申し上げます。



今本学会で何が必要とされているのか、様々なご意見があるでしょうが、その一つとして応用心理学の理論構築を学会あげて行うことの必要性をあげることができるのではないのでしょうか。このことについての私の考えの一端は、第67回大会の会長報告「応用心理学研究における被験者の選択をめぐる諸問題」、及び応用心理学研究、2002, Vol. 28の「応用心理学研究の方法と対象」でも述べましたのでここでは繰り返すは致しません。ただここで強調しておきたいことは、いわゆる応用心理学の範疇に入る心理学関連学会は数多くありますが、それらは学会ごとに独立的に機能し、学会名が暗に示唆するものを相互に認め合うだけのものになってきているのが

現状であるように思えます。日本の心理学界はあまりに細分化されすぎているように思えてなりません。

学会員の数はその学会の水準の高さを必ずしも表すものではなく、需要の高さを示す部分が多いといえるでしょう。本学会の会員数は約千名であって、数から言えば小さな学会といえませんが、その成り立ちと経緯からして応用心理学関連の諸学会がよってたつ理論的基盤を明らかにして、その理論的再構築を行っていく上での中心的存在という立場にあるように思えます。歴史的にもあるいは現状を見るにつけ応用心理学とはそのような立場にあります。国際応用心理学会もそのような役割を果たしてきたのではないのでしょうか。

日本応用心理学会総会あるいは応用心理学研究での発表を拝見しますと、実に多岐の領域にわたっていることがわかります。その研究方法も様々なものがあります。それが応用心理学の特徴であるといえなくもないのですが、それだけ広範囲の領域を包含している理論的背景についての検討が求められているのではないのでしょうか。このような観点に立った理論構築によって、日本応用心理学会の存在意義がますます高まっていき、ひいては学会活動の活性化に結びついていくのではないかと考える次第です。応用心理学研究にその特集を掲載するののもその一つの方法ではないかと思われます。以上最近考えていることの一端を申し述べさせて頂きました。

(常任理事、京都大学名誉教授)

認定「応用心理士」認定審査委員会 からのお知らせ

委員長 馬場 房子

日本応用心理学会認定「応用心理士」認定審査委員会は、平成15年度後期分の資格認定審査を行った結果、以下の5名の会員に資格を認定しました。

- 221 北川 公路
- 222 小倉 直子
- 223 森 周
- 224 佐藤 誠
- 225 和田美知子

なお、平成16年度前期分の受付は、4月1日(木)から5月31日(月)までですので、資格要件を有しながら、まだ認定「応用心理士」の資格を取得されていない方は、申請手続きをしてください。

手続きの詳細につきましては、「資格申請の手引き」第4版をご覧ください。また、何かご質問がありましたら、応用心理士事務局のほうにお問い合わせください。

認定「応用心理士」は応用心理学会会員のシンボルです。この資格は、応用心理学の研究や応用心理学と関係がある職で活躍されている会員に、応用心理学の専門職としての資質があることを認め、社会的地位を承認するための一助とすることを目的に制定されたものです。しかし、社会的に承認されるためには、社会で活躍している多くの会員が取得されることにあります。資格要件を有されている会員の方は、ぜひ取得されますようお願い申し上げます。

(亜細亜大学経営学部教授)

学会賞・奨励賞選考委員会から 委員長 垣本由紀子

2004年度日本応用心理学会学会賞・奨励賞候補者推薦依頼書を、5月中旬に理事各位および名誉会員各位宛に発送いたします。

常任理事会での第2次選考委員会を考慮し、推薦

者関係書類の提出締め切りは、6月7日(月)必着としたいと思います。

書類到着から、提出まであまり時間がないため、今からお心がけいただきたくよろしくお願い申し上げます。

(実践女子大学教授)

シンポジウム委員会報告

委員長 松浦 常夫

学会主催の2003年度公開シンポジウムが昨年の11月に開かれました。これまでは1月末の最終土曜日に開催されることが多かったのですが、今年度は気候の良い秋に開催いたしました。テーマは「高齢者の交通事故防止対策：再教育の方法をめぐって」で、企画・司会を松浦が、話題提供を中央自動車学校の石川淳也氏、帝塚山大学の蓮花一己氏、東北工業大学の太田博雄氏、および茨城大学の鈴木由紀生氏にお願いし、早稲田大学の石田敏郎氏と大阪学院大学の森清善行氏にコメントを頂きました。これらシンポジストの先生方、会場となった東京富士大学の岡村理事長と浮谷事務局長、前回のシンポジ

ウム委員の藤田先生をはじめ多くの方々のご協力で、盛会のうちにシンポジウムを終えることができました。



(実践女子大学教授)

2004年度日本応用心理学会 研修会について

委員長 林 潔

本年度の研修会は9月の日本大学商学部の学会大会の期間中に行われます。

講師と演題は次のとおりです。

小野公一先生(亜細亜大学教授)

キャリア発達とメンタリング

正田 巨先生(常磐大学教授)

五感の体操—新しい安全運転技法

時間帯につきましては、まだ確定していないところがありますので、大会校の日本大学からの2号通信をご覧ください。

研修会へ学会員多数のご参加をお待ちしております。

(白梅学園短期大学教授)

【訃報】

名誉会員の松村康平先生が平成 15 年 11 月 17 日にお亡くなりになりました。ここに謹んでお悔やみを申し上げますとともに、生前の本学会に対するご尽力に感謝申し上げます。

事務局だより

平成 16 年度年会費納入振替用紙在中封筒の中に、住所・所属など会員登録状況確認のためのご案内を同封させていただきました。平成 16 年度に発行する会員名簿の原簿作成のためです。変更のある会員の方は期日までにご返信をお願いいたします。ご返信の無い場合には、現在登録されている内容が掲載されます。

• 日本応用心理学会事務局

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 3-8-8 (株)国際文献印刷社内
電話 03-5389-6491 • FAX 03-3368-2822 E-mail jaap-post@bunken.co.jp
学会ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jaap/>

• 日本応用心理学会「機関誌編集」事務局

〒187-8570 東京都小平市小川町 1-830 白梅学園短期大学心理学科 荻野研究室内
電話 042-346-5622 • FAX 042-349-7373

• 日本応用心理学会認定「応用心理士」事務局

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 3-8-1 東京富士大学 応用心理学研究室内
FAX 03-5386-2451

発行 広報委員会

委員長 藤田圭一

日本応用心理学会事務局

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 3-8-8
(株)国際文献印刷社内

電話 03-5389-6491 FAX 03-3368-2822
